

翻 訳

3つの記憶の物語

横 山 千 晶

「アイ・アム・ナット・ア・ジュー」 ジョン・ビゲネット

John Biguenet, 'I Am Not a Jew,' in *The Torturer's Apprentice: Stories* (New York: HarperCollins, 2001).

ホテルのこじんまりとしたロビーに続く狭い階段を降りながら、彼はエレンのことを考えていた。彼女はベッドで本を読んでいた。その様子はどことなく疲れ、忍び寄る老齡を感じさせた。お互い様だった。

^{グリュースゴット}「コンバンワ、^{ヘア アンダーソン}アンダーソンサマ。」

受付にいた若者が会釈して話しかけてきたので彼は不意を突かれた。「ああ、こんばんは。」無意識に彼は二階を指さして付け加えた。「妻は上にいるんだけど。」受付係は、わからないといった様子で首をかしげた。「部屋にいるんです。ちょっと一人で散歩に行ってくるけど。」アメリカ人は説明しようとした。「^{ヴァイデスッテ}ナンデスッテ？」

アンダーソンはこの表現は知っていた。この小さな町で何度も何度も使われるを得なかった言葉だ。ここではどうやら誰も英語を話せる人がいないようだった。「ごめんなさい。」どの店員にも会うたびにまず、謝った。「なんですか？ モウイチド。」ありがたいことに妻のドイツ語はずっとましだった。今日の午後にここに着いてからの会話はほとんど妻が請け負ってくれた。さる有名なレストランでの注文すら妻がやってくれた。わざわざ100キロも遠回りし

てヴァルトハイムに来ようと思ったのもこのレストランのためだった。

「^{ニヒツ}イインデス。」彼は笑いながらかぶりを振った。「気にしないで。」

アンダーソンは取っ手を回して扉を開けた。「ジャア、^{アウフ}マ^{ヴィダゼーエン}」と受付係が声をかけた。

若者はこちらをじっと見ていた。答えを待ちながら。「ああ。^{グリュースゴット}サヨナラ」と彼は答えた。それから、この言葉があまりに不思議に耳に響くものだから、もう一度英語でも繰り返してみた。「^{グリートゴッ}神にご挨拶を。」

もう午後 10 時をとうに回っていた。しかし町の明かりはまだ煌々とついていた。活気あるマルクトブラッツ。しゃれたホテルやカフェが立ち並んでいる。しかし、広場につながる小道はすでに暗闇の中に沈みかけていた。あちこち見ながら彼はアイスクリームでも、と思った。昼間にぎわっている店のウィンドウに掲げられていたのは「カルトオフエルアイス」の写真だった。盛り付けられたアイスクリームはまるであれやこれやのトッピングで彩られたベイクト・ポテトそっくりだった。ほかの写真にも魅せられた。どうやら肉団子入りのトマトソースをかけた細めのパスタのようだった。こちらは「スパゲッティアイス」である。しかし金を入れたサテンの腹巻の締め付けぐあいで、待てよと思った。今回の旅でかなり太ってしまっている。

細長い小道を半ばほど行ったところで、噴水が彼の眼をとらえた。いつもの習慣で、肩越しに後ろを振り返った。広場は家族連れや、じゃれ合うティーンエイジャーたちやベンチに腰掛ける年配の夫婦で込み合っていた。怪しげな者はいない。彼は自分の警戒心を笑った。ここはアメリカじゃないんだ、そう自分に言い聞かせた。

噴水は近づいてみるとごくごく小さなものだった。台座には何かこのあたりの民族衣装を身に着けた女性がむき出しの足でしっかりと立ち、両手に持った水差しから水を注ぎこんでいた。彼が片膝をついてもっと詳しくその細部を見ようと思ったのはこの女性ではなく、噴水の縁の部分だった。しなやかな生き物が円になって群れている。刻み目を入れた羽と細長い険しいその顔が女性が抱える水差しから絶え間なく落ちる水を受け取るブロンズ製の水盤の縁を形作っていた。薄暗い明かりの中では、この生き物たちが天使なのか悪魔なのか

見分けがつかなかった。

＊

小道を抜けると人気のない通りに出た。通りは曲がりくねって近代的な住宅街に入っていった。道路の縁石に沿って規則正しく駐車している車の列に覆いかぶさっている木立は何の木なのか彼にはわからなかった。家のたたずまいは安っぽかったが、手入れが行き届いていた。正面玄関の隣には小さな庭がついている。戦後建てられたのだな、もちろん、と彼は思った。

そのままぶらぶらと歩いていった。同じようなレースのカーテンに目を見張った。テレビが放つ青い光にあわせて脈打つようだ。カーテンを閉めていない窓が一つあって、何気なく見やるとはげた男が『マッシュ』を見ていた。ふと気がつくと同じ窓辺の一角に、灰色の猫が座って、こちらをじっと見ている。

この一月ほど、ずっと妻と過ごしてきた。パリでレンタルした、がたの来た緑のルノーの中で。そしてフランスとドイツを横断しながら泊まり歩いた二十という小さなホテルの中で。やっと一人になれたのだ。夏の夕べに少しずつ失せていく北の光の中でこうして一人っきりでいる至福を味わいながら、さほど注意を払うこともなく一つの通りから次の通りへと歩いていく。気がつく、この小さな町の郊外へときてしまっていた。この最後の通りは、道というよりも大通りといった風情で、小さな丘を曲がりくねって登っていき、その向こう側の斜面に広がる墓地から向きを変えて伸びていた。丘の頂から向こう側へと降りていくと、木々がうっそうと茂っており、アンダーソンは突然、田園風景の中にいた。丘のふもととはさらに繁みが黒々として、その後ろに何があるのかわからなかった。暗闇がその根元や木立の間に降り始めていた。男は時計を調べた。遅い。もう帰らねば。

もと来た道を戻ろうと振り向きざまに、墓地に入るアーチ門の脇の飾り板にはめこまれた、奇妙なアルファベットが目に入った。ヘブライ語である。少しぎょっとした。

門は開いていた。深さを増してくる薄明かりの中、立ち並んだいくつもの墓石の中で2～3の錬鉄製の墓石が浮かび上がっていた。フェンス越しでもアン

ダーソンは亡くなった人々の写真の額縁を一つひとつ見ることができた。無意識に、錆び付いたちょうつがい^{ちょうつがい}をきしませて鉄の扉を開けると、小石を敷き詰めた道をたどって一人ひとりの写真を見ていった。

装飾を掘り込んだ鉄の墓標はもっとも古い墓だった。溶けた鉄が鋳型に注がれ鍛えられ、渦巻き飾りやアラベスク飾りに作られていく。おそらく帝政時代最後のころに人気だった装飾だろう。中には19世紀のものもあるのに気がついた。石でできたものはだいぶん新しかった。20年、30年代のものだ。

陶製の肖像画と手で彩色した写真が楕円形の厚い覆いガラスの中で色褪せていた。暗い中でも、亡くなった小さな子の顔を縁取るボンネットや軍服の堅い立ち襟から突き出した兵隊の顔、ヤムルカをかぶった老人、真っ黒な眼をした若い女性をどうにか見分けることができた。この足の下に失われた世界が眠っている。彼はもの思いに沈んだ。

彼は心を奪われていた。夜の闇は森から丘上へとじりじりと進んで来た。それでもアンダーソンは足早に墓から墓へと歩を進め、身をかがめて死んだ者たちの顔を見つめ、その名を一つひとつ声に出して読んだ。

シュテアー アウフ ドゥー ユーデンシュヴァイン
「立て、このユダヤの豚野郎！」

どすの利いた声に不意をつかれた。足音が砂利道を忍び寄ってくるのがわからなかったのだ。1903年に11歳で亡くなったベラ・ローゼンバーグの墓の前でまだ腰をかがめたままの姿勢で彼は振り返った。

銀色の鉾を打った黒いブーツを履いた、スキンヘッドのにきび面の若者が、アンダーソンのことを見下ろしていた。このリーダーの後ろには三人の少年が控えている。揃って黒装束でスキンヘッド、そして重そうなブーツを履いていた。三人は声を立てて笑っていた。一人の前腕にはいびつな鉤十字が彫られている。

もう一人の小太りの少年がこちらに向かって歯をむき出してにらみつけていたが、半分芝居じみていると彼は感じた。アンダーソンの目にその黄色い歯並びが飛び込んできた。ぼってりとした唇の後ろにがたがたと歯並び悪く突き出している。どこに行ってもこの歯並びの悪さが目につくのだった。どうしてヨーロッパ人というのはこんなにも歯の手入れに無頓着なんだろう。そんなこと

を一瞬思うか思わないかのうちに握り締めた指の先に生々しく鉤十字を彫り込んだ一本の手が彼の喉元を締め付けて、なすすべもなく彼は立ち上がらざるを得なかった。

そして突然気がついた。この墓地のなんと奥深くまで来てしまっていたのだろう。

「^{シュプレヒエン}ズィー
「シャベレマスカ……」と彼は言いかけたが、喉を締められてはしゃべるのは容易ではなかった。「英語はしゃべれますか？」しわがれ声でたずねた。

答えはなかった。リーダー格が一步前に進み出ると、胸を一突きした。ドンッと。刺青を彫った手が彼のことを吊るし上げていなかったらその場で倒れていたことだろう。

彼はエレンのことを思った。ガストホフ・ツム・アルテン・フリッツの一角の寝室に横たわってガイドブックの中の次の目的地、シュツットガルトについて読んでいた彼女のことを。

「^{フェアゾイヒテスユーデン} ^{シュヴァイン}
「汚ねえユダヤの豚野郎」と若い男がののしった。

恐怖が波のように押し寄せてくる。最初は浅く、しかし打ち寄せるたびに深くなるのしかかるように。その波が彼に当たって碎けるたびに世界は狭まっていく。首を締め付けているこの手のごとく。そしてやがてはこの丘のふもとの森の中でこうこうと鳴く夜の鳥のこと以外は、何も彼の意識の中に入ってこなくなった。目の前が暗くなっていく。まるで濁った水の中に沈み込んでいくかのように。そして少年たちは気ぜわしく彼の周りを歩きまわっていた。ブーツが砂利を引っ掻き回し、チェーンの輪がすりあって音をたてる。ぶつぶつと聞こえるあざけり、彼らの汗と自分の尿のにおい。

「^{シャウ マール、デア ユーデ} ^{ビストウ イン} ^{ザイネ、ホーゼ}
「見ろよ、このユダヤ人、漏らしやがった」少年の一人がアンダーソンのズボンの股間に広がっていくしみを指差しながら声を上げて笑った。

「^{シャイセ}
「くそ！」男の襟元を締め上げていた少年は、手を緩めて後ずさると叫んだ。
「^{ドレッキゲ} ^{ユーデン}
「ユダヤ人どもめ。」

「ユーデン？」ようやくアンダーソンはその言葉を理解した。「^{ナイン}
^{ニヒト}チガウ」彼は語気を強めた。「ユダヤ人じゃない、ユダヤ人じゃない」自らを指差しながら彼は繰り返した。

一人の少年がおどけてそれをまねて見せる。みんな声を上げて笑った。

彼は必死に弁明し続けた。いまやすっかりうろたえて文法を無視したドイツ語で叫んでいた。「ワタシ、ユダヤジンドモナイ、ワタシ、ユダヤジンドモチガウ」それぞれの単語の不器用な響きが何かが違うぞと告げていた。正しい動詞を見つけようと口ごもった。「ワタシ、チガウ、ユダヤジンドモジャナイ。」そしてついにたどり着いた。「ワタシハユダヤジンドモジャナイ。」

心の底からほっとして今度こそ、正しく言えた、少なくともほぼ正しく言えたと確信して、敵意をむき出しにした顔を一人ひとり見回すと、ゆっくりと、同じフレーズを繰り返して言った。何度も何度も呪文のように。「ワタシハユダヤジンドモデハナイ。」私はユダヤ人ではない。私はユダヤ人ではない。

「ソウカイ」とリーダー格の男がちょっとばかり優しい笑みを浮かべて言った。「アンタ、『ユダヤジンドモ』ジャネエンダナ？」

「チガイマス、アナタ」すぎるように言葉を押し出す。「ユダヤジンドモジャナイ。」

「そんな、くっせえアラブ人じゃねえのかい。」リーダー格の男は言葉を続けた。

「チガウ、チガウ、アメリカジンデス。ワタシハアメリカジンダ。」そのとき、言われたのは英語だということに気がついて、彼はもっと静かな口調で繰り返した。「私はアメリカ人です。」

リーダーはほかの二人のほうを向いた。「この豚野郎は、アメリカ人だよ。」そして薄ら笑いながら英語で付け加えた。「ユダヤ人たちじゃねえって言ってるぜ。」

太った少年が彼に近づいた。「ほお、アメリカ人かい。でもユダヤ人じゃねえって、え？」

恐怖して彼はドイツ語で答えた。「ソノトオリデス。アメリカジン、ユダヤジンドモジャナイ。」

三人は笑った。それから刺青を入れた少年が言った。「じゃあ、アメリカに帰ったほうがいいんじゃないか、どうだい？」そして道に彼のことを押し倒した。足場を失ってよろけたが、倒れこみながら、小さなとがった石の上を片手

が滑ってどうにか体を支えた。それから突然、考えるまもなく、彼は砂利道の上を走り出した。飛ばされる野次を耳にしながら。背後から一人が大声で叫んだ。「^{アウフ ヴィダゼーエン}またな」。三人の高笑いが煙のように垂れ込めていた。

＊

門のところまで来ると後ろを振り返った。三人が次々と墓石をけり倒し、冒瀆された墓石にペンキ・スプレーで落書きしているのが見えた。彼は走り続けた。

暗闇が立ち込めていく住宅街をよろよろと進みながら、アンダーソンは広場までの道を元に戻っていかうとした。しかし足は急くものの、この界限を通ったかどうかまったく見覚えがないのだった。よろい戸が下がり、窓辺に明かりのついていない家々は、さっき通りかかった家とは違う様相を呈していた。二度、車が近づいてくるのを耳にして、二度とも彼は身を隠した。墓地で押し倒されたときに砂利道についた手がずきずきと痛んだ。手の平には砂利でいくつもの引っ掻き傷ができて、生傷は泥で汚れていた。どこかで曲がる場所を間違えたんじゃないかと思えてきた。後戻りするには怖すぎて、彼はそのまま進んでいった。やがて、よくわからないまま、長い湾曲を描く道をたどっていると、一時間以上前に散歩を始めた場所を思い出すことができた。それから、どうやら同じ道をぐるぐる回り続けているらしいと気がついたそのときに、彼は横の小道の先にマルクトプラッツのほのかな明かりを認めたのである。

人気がなくなっていく広場を横切ってガストホフ・ツム・アルテン・フリッツへと向かった。今頃エレンは彼を待っている間に眠ってしまったことだろう。ちょうどそのとき、彼は自分の名前が呼ばれるのを耳にした。

「アンダーソンさん。」それはホテルの主人、ジーグラー氏だった。屋外カフェのテーブルに一人で腰掛けしている。夫婦がその午後にチェックインしたとき、挨拶に出てきたのがジーグラー氏だった。「アンダーソンさん、ご一緒しませんか。」

息を切らしながら、彼はどうにか答えた。「こんばんは、ジーグラーさん。」

「どうぞ」と老人はなおも、テーブルの空いた席を示しながら言った。

アンダーソンは湿ったパンツがいまだに身体にまとわりつくのを感じていた。両手をズボンの前に重ねた。「本当にもう帰らないといけません。妻にはちょっと出かけてくると言っただけなんです。」

「一杯だけお付き合いくださいな。」ジグラーはほかのテーブルの後片付けをしているウェイトレスのほうを向いた。「^{アイ}ン^{アル}ト^{ビア}と^{ウン}ト^{アイ}ン^スナ^ーを一杯^ビル^ス願^ヒい^テます。」それから泊り客のほうを向くと、微笑んだ。「この界限を見て回っていらしたんですね。違いますか？」

老人の誘いを断ることは無理だった。「散歩していたんです。」座りながら彼は言った。部屋に帰る前に一杯やっていったほうがいいのかもかもしれないと自分に言い聞かせた。テーブルの下に置いた手は、いまだ残るアドレナリンのせいか震えていた。

「そう、私も時々夜に歩くんです。脚があまり痛くないときはね。」

アンダーソンはジグラーの骨ばった右手にはめられた結婚指輪に目を留めた。ここではすべてが違うんだ、と彼は改めて思った。すべてが逆なんだ。そこでちょっとした冗談を言おうとした。「夜遊びを許してくれる妻を持っていて、運がいいですよ。あなたも私も。」

「いや、マルガレーテはかなり昔に亡くなりました。本当に昔にね。残ったのは私だけ。」

アメリカ人はふっと息をもらした。「すみません。」

「いやいや、もうはるか昔のこと。気にする必要なんてありません。」

アンダーソンはそれ以上何の言葉も思いつかなかったが、ジグラーはビールをゆっくりと飲みほしながら、この沈黙には少しも気を留めない様子だった。

「ああ、来ましたね。」少女が濃い色をしたビールのマグと薄い色をしたビールのグラスをテーブルの上に置いた。紙片をそこに添えると、老人の前にある空のマグを下げた。ジグラーはその紙片を灰皿の下にはさんであるほかの紙片と一緒にした。「お好きなほうをどうぞ、アンダーソンさん。昔ながらのビールかピルスナーか。」

アメリカ人はピルスナーに手を伸ばした。

「黒ビールはお好きじゃないと見えますね。」

「味に慣れないんです。」

「私はこれ一辺倒」と老いたドイツ人は言った。そして一口すすった。

「^{ゼーア}うん、^{グー}まい。そちらはどう？」

アンダーソンは背高で細身のグラスに注がれた黄金色のビールを飲んでみた。「おいしい、本当に。」

「どうですか、私たちのこの小さな町は。」

アメリカ人はうそを語り始めた。しかし、ユダヤ人墓地で起こった恥辱の物語が口から零れ落ちた。「一人だったんです」と彼は説明した。「そこには誰もほかにいなくて、あたりは暗くなってくるし。」

「^{ダス}それはひどい。^{イスト}ひどい、^{シュレックリヒ}まったく」と老人はうなずきながら言った。あたかもその話を前にも聞いたことがあるかのように。「ただのチンピラですよ、やつらは……。あなたの言葉では、そういうんじゃないかったですか？
^{フーリガン}チンピラって。」

しかしアンダーソンはまだ語り終えていなかった。「あまりに恐ろしくて考える暇ありませんでした。ただ叫んだんです。『^{イツヒ}俺^{ビン}ユダヤ人^{ニヒトユーデン}たちじゃない、俺はユダヤ人^{イツヒビンニヒトユーデン}たちじゃない』って。」

「『^{カイ}ユダヤ人^ンじゃない』ですね。」ジグラーはそう訂正して、それから優しく付け加えた。「致し方なかったのでしょうか。ほかに何ができたって言うんでしょう。」

疲労困憊したアメリカ人は、この年老いたドイツ人のこういう場合の決まり文句を否定しようとしなかった。「そのとおりですよ、ほかに何ができたって言うんでしょう。」

「誰だって同じようにしたことでしょう。誰があなたを責められますか。」小さな宿屋の愛想のよい主人は話題を変えようとした。「ああ、ドイツではこういう諺があるんです。Wenn einer eine Reise macht, so kann er 'was erzählen.」

アンダーソンにはこのドイツ語がよくわからなかった。「^ヴなんです^イって？」

老人は残っていたビールを飲み干した。「旅をすると……」英語の言葉が思いつけなくなった。「旅をすると……」それから思い出した。「旅すれば、土産

話を持ちかえる。」そうでしょうと肩をすくめると、ジューグラーはにっこりと歯を見せて微笑んだ。彼の入れ歯は真っ白できれいに並んでいた。

アメリカ人もグラスを飲み干した。「おっしゃるとおりですね。ジューグラーさん。私に何ができたでしょう。誰だって同じようにやったことでしょう。」

「それはひどい、確かに。でも誰があなたを責められるでしょう。」

今やアンダーソンはまるで傷つけられた人であるかのような口調になった。「そう、誰が？ 僕はユダヤ人じゃない。それは僕のせいですか？」

「そのとおりですね。」

アメリカ人はうなずいた。老人の微笑みに返して。それから彼は少女を呼んだ。「黒ビールを二つ、^ビ^テお願い。」

頭上では、かすかな機械がききき……と立てる音と町の古い鐘楼のてっぺんについた鉄の扉がぎしぎしと開く音がしたが、二人は気がつかなかった。誰にも見られることなく、ブロンズ製の斧を持った男がゆっくりと出てきて塔の壁の張り出し部分の上に姿を現し、大きな時計盤のまん前で止まった。その顔を40フィート下のいまやほとんど人気の失せたマルクトプラッツのほうに不吉にぐいと向けるときこりは斧を持ち上げて、振り下ろした。なんどもなんども。日中は、斧が振り下ろされるたびに鐘が鳴って時が告げられた。しかし夜の帳が降りきって、眠っている町の上に12回音もなく振り下ろされる斧に、鐘は応えることはなかった。

＊

小型のパンとお茶という翌朝の朝食の席でも、ドイツを横断してフランスに入り巴りに戻る長時間にわたる車中でも、それどころか、シンシナティに向かう飛行機の中でも、ピーター・アンダーソンはユダヤ人墓地で起こった出来事について妻に話すことはなかった。しかし無視しようにも無視できない肌の下のしこりのように、あのときの出会いの恐怖は忘れようとすればするほど、執拗に思い返されるのだった。

アンダーソンはパレスチナ人とイスラエル人の間に交わされた新しい和平協定を報ずる見出しを目にするのとはばかれたし、何気なくラジオのダイヤル

を回してドイツ語のオペラを耳にするのにも耐えられなかった。そして、夕暮れ時に墓地の前を通るたびにヴァルトハイムでのあの夜に初めて味わった銅を思わせる苦味を帯びた味覚が必ずのど元へとこみ上げてくるのだった。しかし、われながら驚いたことに彼が感じる怒りの矛先は、彼のことを痛めつけたスキンヘッドたちにではなく、すでにこの世にいない少女、ベラ・ローゼンバーグに向けられた。その消えかけている肖像画の前で彼がひざまずいているときに、やつらが近づいてきたのだ。それだけではない。怒りはあの小さな墓地に眠っているすべてのユダヤ人たちに向けられていた。もちろん、それは恥ずべきことだった。攻撃者ではなく、犠牲者たちを責めるなんて……。だから彼はこのような下劣な感情を腹の底から湧き上がってくる苦々しい思いとともに飲み込もうとした。しかしもしも彼が自分の気持ちに正直になれば、次のように認めざるを得なかった。ある意味責任はユダヤ人にある、少なくともあそこで起こったことの責任はユダヤ人にあると感じてしまう、と。

責任を誰かにかぶせたいというアンダーソンのやむにやまれぬ気持ちは、墓地で起こった屈辱的な出来事のせいだけではなかった。少しずつはっきりしてきたことがあった。ヨーロッパから戻ってきた彼はもはや昔の彼ではない、と。たとえば、戻ってきて一週間後、夕食のあとにエレンが、今から急げばダウントウンの行きつけの劇場のひとつで映画を観られるわよ、と誘ってきたとき、夫のほうは『エンクワイアラー』紙で読んだ、4番通りのオフィスビルの裏で起こった殺人事件のことを語りだすのだった。「週末まで待ってケンウッドのモールで見たほうがよくないかい」と彼は諭すのだ。それから、クローガーで食料品を買いに行ったときは、入り口の近くの駐車スペースが空くまで駐車場をぐるぐる回って妻を辟易させたりした。「どういうつもり？ 二人とも年取って数歩も歩けないってわけ？」妻は文句を言った。アンダーソンには返す言葉がなかった。少し離れた列にはいくらかでもスペースが空いているというのに、どうして行き過ぎなくてはいけなかったのか自分でもわからなかった。しかしもっとも困った変化はベッドの中で明らかになった。

結婚して程なくして、子供が絶対にできないと知ったときは心の底からがっかりしたものだが、夫婦は避妊する必要がないからと、気の赴くまま好き放題

に愛し合い、しばしば度を過ぎた放埒さも許されると考えるようにした。二人の間のひそかな誇りでもあったのだ。濃厚な、そして自由奔放なセックスは。しかしはじめで、アンダーソンは妻に抱かれていてその気になれないときがあることに気がついた。彼女は、長旅のただの疲れのせいよ、とさほど気にもせずと言った。しかし彼はこの失態をいま一つの恥辱の痛みとして感じていた。この恥辱はヴァルトハイムでのあの夜から、毎朝起きるたびに感じてきたものだった。

同じ恥辱がもっとも身に沁みて思い返されるのは、ぬれた下着が肌にまといつくあの感覚を思い起こすときだった。ばかばかしいとは思っても、下腹部にまといつく、生温かな濡れた布地、自分の尿のアンモニア臭、しみの前に両手を重ねたひどく情けないしぐさ、それから部屋に戻って、朝エレンに見つからないようにと、湿った下着を丸めてゴミ箱の一番下に隠したこと……お漏らしをするという子供のころのあの屈辱が何よりも彼を狼狽させるのだった。

アンダーソンがその屈辱にさいなまれてなすすべもないとき、あの恥の記憶に突き動かされて、ユダヤ人たちに対する苦々しい抗議の念はいや増しに募ってくるのだった。そして彼は論証しようとした。結局墓地にいたあの4人のおろかなチンピラたちはその体に彫り込んだ鉤十字を自分たちで作り出したのではなかったのだ。彼らはユダヤ人たちを自分らの不幸の源と決め付けたわけではなかった。違う、彼は自分に言い聞かせた。あの少年たちは、何千年と生きながらえてきた呪いの言葉を繰り返したに過ぎない。そして結局、くる世紀もくる世紀もユダヤ人たちがその隣人たちに憎しみを引き起こしてきた理由は何なのだろう。

このようなさまざまな感情が何週間にもわたってくすぶったあと、ドイツでの一件は彼とエレンが午後の買い物から戻る車の中で、何の心の準備もないまま彼の口から語られたのだった。

「でも、どうして教えてくれなかったの？」妻は尋ねた。話の内容もそうだが、彼が黙っていたことはエレンをひどく困惑させた。

*

結婚生活を送る間、数え切れないほどなんども、妻にはかなわないと思うことがあった。語学の才能、方向感覚、どんなものを食べたのか覚えていること、往々にしてこうするのといったら聞かないこと。もうこのごろは自分でも十分わかっていて。彼女に寄せるこの信頼の念は、次第に脅迫観念に変わることがままあるということが。だからアンダーソンは、買い物から戻る途中に話して聞かせたことについて、その日の夕食の席でエレンが質問してきてもそれほど驚きはしなかった。それまでは彼女の同情を期待する気持ちがあった。まっすぐな支持の念である。しかし、彼女は起こったことの状況について、あれやこれやと探りを入れてきたのである。もう暗くなるというのに、なぜ町のはずれに散歩になど出かけたのだ、少年たちは正確にはどんなことを言ったのか、彼はそれにどう答えたのか。

この詰問に嫌気がさして、さらに詳しく彼女が聞きだそうとしたときに、彼はジークラー氏の言い訳をそのまま頂戴することにした。「どうしようもなかったんだ。何ができたっていうんだよ。」

「わかっている、きっとすごく怖かったって。」

「ちがうよ、怖がってなんかいない。」彼は言い返した。彼女の言葉に傷ついたので。「でも現実的にならなきゃいけないだろ。周りには誰もいなかったんだ。僕とナチ連中だけだったんだ。」

彼はそこで言葉を切った。エレンが同意してくれると期待して。

「どっちにしろ」エレンが何も言わないことにイラつきながら、彼は言葉を続けた。「どうすればよかったっていうんだよ。」

それでも彼女は何も言わなかった。

「むしろ殴られたほうがよかったとでも？」

「まさか、もちろんそんなことないわよ。」彼女はため息をついた。「でもあの人たち、本当にお前を殴るぞって言ったの？」

「ちょっと、やつらが俺に何をするつもりだったって考えているんだよ。」

「わからない。ただね……。」

「君は僕の連れ合いだろ。ちがうか。逃げ出せたことを喜んで当然なんじゃないか。やつらに殺されてたかもしれないんだぞ。」

「あなたがやったことを理解しようとしているだけよ。」

「僕がやったこと？ 気にかけてしかるべきは奴らがやったことだろ、あのくそ餓鬼どもが。」

「思ってもみなかったのよ、私の夫が、あなたが……。』

「僕はユダヤ人じゃない。それは俺のせいだよ？」 憤って彼はさえぎった。ドイツに行ったときから彼女の態度はとげとげしいと感じていた。二人の肉体的な関係が希薄になってきた最近では特に冷淡になってきたようだった。

彼女はまだ言いたいことを言い終わっていなかった。しかし彼はそれ以上の詰問をかわそうとした。「誰だって同じようにやったさ。」男は吐き捨てるように言い放って夕食の席から勢いよく立ち上がった。

その夜、二人はなるべく行き会わないようにした。しかしベッドに入るとき、夫が衣服を脱ぐのを眺めながらエレンはまた例の話を持ち出した。

「あなたは嘘をついたのよ、わかってるでしょ。」

「誰に？ 君にか？ 話したことは全部本当だ。一言一句ね。」

「私に対してじゃないわ。墓地にいたそのナチ連中に嘘をついたのよ。」

「どうして嘘なんだよ。僕はユダヤ人じゃないんだ。」もうこの話にはうんざりだったし、また彼女が蒸し返したことに腹が立っていた。「イッヒ・ビン・ニヒト・ユーデン。」

横たわったままエレンは彼のことを見据えていた。^{ヴィア ズイント アレ ユー デン}「私たちはみんなユダヤ人なのよ。」彼女はささやくように言った。

「^{ヴィー ビテ}何だって？」こみ上げる怒りをゆっくり吐き出すように言った。またこのくだらないお遊びにつき合わされているのだ。

「私たちはみんなユダヤ人なの。」

アンダーソンは理解できないという顔つきで彼女を見た。

「ヒトラーが現れてから」妻はほとんど柔和といってもよい口調で説明し始めた。「ほかにどんな選択があるというの？ 私たちはユダヤ人にならざるを得ないのよ、私たちみんな。」

男は女の感傷的な態度を鼻で笑った。「じゃあ、どうすればよかったって言うんだ。あっちは4人もいたんだぞ。」

「わからない。」エレンは認めた。「でもどっちにしろ、結局あなたは、間違った方に転がってしまった。」

いまや彼は憤っていた。「話をあまり複雑にしないでくれないか。」

「いや、単純なことだわ。」彼女は言葉を続けたが、口調は強くなっていた。「その夜、あの人たちはこの世をユダヤ人とナチスに分割してしまったのよ。そしてあなたはユダヤ人じゃなかった。」

エレンが彼に背を向けて眠りに付いてからも長いこと、アンダーソンは目を覚ましたままだった。暗闇が降りてくる頭蓋骨や骨片で築かれたドイツの丘の頂で、彼が耐えなければならなかった恐怖のあの数分を、頭の中で何度も繰り返して思い描いていた。そしてこの小さなドラマがどんな風に解釈されるのか、あれやこれやと考えているうちにやがてその中で彼の役割はどうでもよいことになって、最後には彼のことを救ったあの短い文句へと集約されていくのだった。「アイ・アム・ナット・ア・ジュー。」

何度も繰り返してこれらの言葉を口に出してみた。

寝室はひっそりとしていた。眠っている妻の不規則な寝息がわずかに乱すだけのこの静寂は、彼を恥じ入らせた。

「じゃあ、どうすればよかったんだ。」アンダーソンは暗闇に問いかけた。いくら待っても答えは暗闇の中に浮かび上がってくることはなかった。

「あなたも含めて何もかも歴史」ジェニー・ホロウエル

Jenny Hollowell, 'A History of Everything, Including You,' in *New Sudden Fiction: Short-short Stories from America and Beyond*, eds. Robert Shapard and James Thomas (New York and London: W. W. Norton and Company, 2007).

まずあったのは、唯一の神、あるいは八百万の神、あるいは虚空。次に合体、空間、膨張、爆発、内部爆発、粒子、物体、燃焼、融合。混沌から秩序が

生まれた。星が生まれ、輝き、消えた。もろもろの惑星が目には見えぬ楕円を描いてさまざま星雲を横切りつつ回り、自然の中の諸要素は合体し、形をなした。

生命が現れた、あるいは創造された。細胞が振動し、分裂し、呼吸を覚え、陸地に到着した。まもなく足が生え、ひれや手や触覚や口や、耳や、羽や、目ができる。目は見開かれすべてを取り込もうとした。這いずり回り、大きくなり、舞い上がり、泳ぎ、腹ばいに進み、踏みしめて進むこの世界を取り込もうとした。目は開き、閉じ、また開いた。私たちはこれを「まばたき」と名づけた。

私たちの頭上にある星が輝いていた。私たちはこれを太陽と名づけ、この地面を地球と名づけた。こうして私たちはすべてに名前をつけた。私たちも含めて。私たちは男と女だった。そしてこれだけではさびしいと思ったので、もっと私たちを作り出す方法を編み出した。私たちはこれをセックスと呼んだ。ほとんどの人はセックスが好きだった。

私たちは恋に落ちた。神について語り、石をぶつけ合って、火口を作り、それを火と呼んだ。暖を取ることを覚え食べるものもおいしくなった。

私たちはつがいになった。子供も作った。子供たちは泣き、はいはいし、大きくなった。子供の一人は花を引きちぎり、ときどきその花びらを食べた。ほかの子供はリスを追いかけて喜んだ。私たちは戦争をした。金、名誉、女をめぐる。私たちは飢えた。女を買った。水を清めた。私たちは妥協した、飾ることを覚えた、そして秘密を抱えるようになった。一人が呼吸を止めて、青黒くなった。続いてほかの者もそれにならった。最初は彼らを葉っぱで覆ったが、そのうちに地中に埋めるようになった。

彼らのことを覚えていた。彼らのことを忘れた。年を取った。私たちの建物はどんどん高くなった。私たちは法律家を雇って、評議会を作って次々と書類で記録を残した。取引をした。承認した。病気になって治療法を探した。私たちは作った。口紅、ワクチン、ピラティス、太陽光発電、仲裁、お作法、ピストル、窓の装飾、セラピー、避妊、あおり運転、ステータスシンボル、手切れ金、スポーツマン精神、フォーカス・グループ、抗鬱薬のゾロフト、日焼け止

め、造園術、セスナ機、フォーチュン・クッキー、化学療法、インスタント食品、そしてコンピューター。タカ派と母親を憤らせた。

あなたが生み落とされた。歩くことを覚え、学校に行き、スポーツをし、童貞を失い、それなりの大学に入り、心理学を専攻し、ロック・コンサートに行き、政治活動を始め、飲んだくれて専攻をマーケティングに変え、タートルネックのセーターを着て、小説を読み、ボランティア活動をし、映画を観に行き、ブルーチーズのドレッシングの味を覚えた。あなたのことは友人に紹介してもらった。最初はいけ好かないと思った。それはお互い様だった。でも一緒にいるのに慣れた。最初にセックスしたのはアートギャラリーの裏手だった。二人とも酔っ払っていて立ったままやった。あなたは両手で私の顔を包み込み、「きれいだね」といった。あなたもきれいだった。のっばで後ろから街灯に照らされて。それからあなたの家に戻って、ホワイト・アルバムを聞いた。出前を頼んだ。けんかして仲直りして、まっとうな職を得て、結婚して、アパートを買って、必死に働いて、前より食べて、前よりしゃべらなくなった。私は鬱になった。あなたは私を無視した。あなたを見るとむかついた。お酒は飲みすぎるし、お金にだらしなかった。私は上司と寝た。一緒にカウンセラーに行って、犬を飼った。私はセックスの体位の本を買って、二人で一番恥ずかしい体位を試してみた。「手押し車」というやつ。あなたは飛行機の操縦レッスンを受け、『ローリング・ストーン』誌を定期購読した。私はスペイン語を習ってガーデニングを始めた。子供たちも生まれたが、どの子も思うようには育たなかった。でも悪いのは私たちだったのかもしれない。あなたは甘やかしすぎだし、私は厳しすぎた。どちらにせよ、子供たちを愛していた。一人は私たちを残して死んだ。地下鉄の中で刺されて。悲しかった。引っ越した。猫をもらってきた。明日のことはわからない世の中に思えた。分不相応な暮らしをした。私は決め付けがちになりけんか腰になった。あなたは当惑しすぐに疲れるようになった。あなたは私を無視した。あなたにはもううんざりだった。互いを許し合った。昔を語り合った。カクテルを作った。やさしくなった。ボーチに座っていたら、あなたがこんなことを言ったときがあった。「信じられる？」もう最期が近づいていた。そしてあなたの手は震えていた。あなたは何

もかもについて語っていたと思う。私たちのことも含めて。あなたは私にそのことを言ってほしかったのかしら、すべてが失われないように。でも考えるのは私にはあんまりだった。私にはできなかった。最初に戻るなんて。私は言った。「いいや、あんまりね」、そして私たちは太陽が沈むのを見ていた。遠くで犬がずっと吠えていた。そしてあなたは疲れていた。だけれど微笑んでいた、そして言った。「聞こえる？ ^{ひでえや} ラフ、^{ひでえや} ラフ、だってさ。」私たちは声を立てて笑った。あなたはそんな感じだった。

そして今、あなたの問いかけが、私の宿題になっている。この家は手がかりだらけ。私は昔の手紙を読んで、ありとあらゆるところをくまなく探している。あなたのセーターに顔をうずめてみる。一枚の写真をじっと見てみる。これは浜辺で撮られたもの。私たちは太陽に向かってまぶしげに目を細めて、後ろには海がある。これはちょっとした勝利だ。忘れてきたピクニックバスケットとあなたの縞々のビーチブランケットを思い出したのは。これはちょっとした勝利だ。クラゲに刺されて、あなたが叫び声をあげて海から走って戻ってきたことを思い出したのは。これはちょっとした勝利だ。食肉軟化剤のパパインを傷口に塗って、あなたが良くなったよと言ってくれたことを思い出したのは。

あなたに言いたい。今朝、この丘の上に立って、二人のために選んだ場所を見ていた。小さな緑の庭と私たちのかわいい小屋。あの同じ犬が吠えていた。嵐がこちらにやってくる。天国のことは考えなかった。でも私は見た。雲は美しかった。私は見ていた。その雲が太陽を隠すのを。

「だんだん近づいていく」 スティーヴン・ミルハウザー

Steven Millhauser, 'Getting Closer,' *The New Yorker*, Jan. 3, 2011.

彼は9歳。もうすぐ10歳だ。ひょろっと背が高くて肩甲骨が紙袋に入れた何かみたいに内側から突き出ている。真新しい青い水着はこっちはきつすぎるしあっちはぶかぶかだったけれど、だからってそれが何なんだ。大切なのは、

ここに来てしまったということ。ピクニックテーブルのそばに立って、日の光が川面に反射してて、松葉と川の水のかおりが鼻につんとくる。どこかで叫び声が一つあがり、笑い声、ラジオの音楽が聞こえてくる。父さんはバーベキューのグリルから灰を掻き出していて、母さんと姉さんはテーブルからさほど遠くない日当たりの良い芝の上にブランケットを敷いている。おばあちゃんはそこにあるアルミ製の折りたたみ椅子から一つ持って、川に続く急斜面の上に立っている高い松の方へ移動中。そして彼は今一番やりたいことをやっている。一番得意なことをやっている。それは何もやらないでただ立っていること。ちょっとの間、皆彼のことなんかすっかり忘れてしまっている。これってときどきあること。ここにいるってことを誰にもわからせないようにしている。この場所は彼の場所だ。テーブルの上には底の方に白い注ぎ口が付いた魔法瓶がでんと陣取っている。泳いだ後、注ぎ口に付いたボタンを押して、紙コップにピンクレモネードを注ぐ。それはいい音だ。ふしゅー、ぶしゅー。ピクニックバスケットの中に見えるのは、ホットドッグ・ソーセージの二つの包み、ピクルスとマスタードの瓶、そして突き出たホットドッグのパンのお尻、オレオクッキーの箱、マシュマロウ一袋。マシュマロウって「マシュメロウ」って発音するのにどうして「マロウ」って書くんだろう。それから紙皿が横っちょのほうに突き出していて、口を折りこんで閉じてある茶色の紙袋。これはたぶんさくらんぼだな。この一週間彼はずっとこの日を待ち望んでいた。夏、川の近くの公園で丸々一日過ごすためにでかけるってことほど素敵なことはない。見慣れた家々や、空き地はもはやそこにじっととどまっているわけではなくて、車の窓の向こうからこちらにすべるようにやってくる。太陽で熱くなった座席の熱がジーンズを通してじりじりと焼け付くように感じられる。駐車場から川岸の土手にあるピクニック場に歩いていくときに足裏を押し上げる砂利の感覚が今からもう伝わってくる。そして今、彼はここにいる。まさにここ。ジーンズは車の後部座席に脱ぎ捨てられ、Tシャツは母さんの籠バッグの中に押し込めてきた。テーブルの片一方の端っこには日が降り注ぎ、ほかは松の木陰の中だ。おばあちゃんはまだ場所を決めて椅子を開いている。そして、そう。この日がついに始まろうとしている。家の前に行く車のライトがブラインドのじゃばら

を通して彼の部屋の壁に縞模様を作って通り過ぎていくのを眺めていた何日も
の蒸し暑い夜の間に、彼が待ちに待っていたこの日が。とうとうここにいる、つ
いに来た。さあ、始めよう。

でも何かが本当にいつ始まるって誰が決めるんだろう。この日が始まったと
いえるのは、「インディアンの入り江」という文字とトマホークの絵を描いた
木の看板の前を通り過ぎたときなのかもしれない。看板は真ん中に追越し禁止
の黄色い二重線を引いた道が赤い反射鏡を取り付けた木製の標識のところで曲
がる角に立っていた。あるいは車がキャンプ場の坂道をバックして登って、タ
イヤがひざぐらいの高さのぎざぎざの葉っぱの茂みの間を縫う歩道に乗り入れ
たときに始まっていたのかもしれない。でもそれよりもっと前に始まっていた
としたら。朝起きてこの一日がまるで毎日午後は青空続きの丸々ひと夏のように
彼の目の前にずうっと広がっているのがわかったときに。でも彼はただ好き
勝手して、ぶらぶらとしている。いつ始まるのかははっきりとわかっているから。
それは川に入ったときに始まるのだ。それが毎年毎年、夏ごとの彼自身の
決め事なのだ。そうじゃなきゃいけない。この日は川で始まる。そしてすべて
はそれに向かって進んでいく。

はやばやとことを進めたくて仕方ない、ということではない。もうここにい
るわけだから、もう待機時間は事実上過ぎてしまったのだから。だから今の今
まで待っていたその瞬間に向かってじりじりと進んでいくこの興奮を延ばしに
延ばすのを味わっているのだ。楽しみにしているのは泳ぐことそのものじゃない。
だって彼は泳げないのだもの。ゴムのインナーチューブの中に入ってしっ
かりつかまって足をばたばた蹴る。これが好き。こいつが楽しい。やるかどう
かは自分が決める。いや、ちがう。彼が本当にやりたいのは、毎年彼をどきど
きさせるのは、さあ、この瞬間というのを身をもって感じることだ。前もって
自分自身にそうだぞ、と決めていたとおり、長いこと待ちに待った川での一日
の始まりを感じる。すべてはそこに向かって進んでいる、そして物事が
次々と目的に向かって進むときってそうだけれど、びんびんと電流が流しこま

れていくような感じ、ざわざわするものがある。体中にそれを感じる。近づけば近づくほど、その感じが強くなる。

ジュリアは13歳で、その点彼とは違う。三枚のブランケットを敷き終わったらすぐに、急斜面の土手へと走って行って駆け下りることだろう。水辺へと向かうちょっとした岸辺を一気に駆けて川に入ることだろう。いつも彼女はそんな感じだった。なんにでも一直線に飛び込んでいく。ピアノのレッスン、ブルーベリー摘み、トレイルハイキング、海水浴場でのバンパーカー。彼女が言うには彼はあまりに慎重、あまりに引っ込み思案、臆病とも言ってしまうかもしれない。おそらくそうなんだ。でもそれだけじゃない。彼が好きなのは物事がゆっくりと積み上がっていくこと。なぜってそうすれば一つひとつのことが大切であることがわかるから。これって、何か成長しきれていない部分がまだ彼にあるってということなんだろう。それはいつの日かなくなってしまうものだろうか。たとえばこの突き出た肩甲骨やこぶみたいに突き出したくるぶしのように。

「ほらあ、手伝ってよ、大将」とジュリアが言っている。彼はもう見えない存在じゃない。ジュリアは誰かがぶらぶらしているのが嫌いだ。言われて毛布の端っこをつかむ。とたんにジュリアがテーブルからおばあちゃんが座っている松の木のほうにかけていったかと思ったら、もう急斜面を下って見えなくなってしまった。次の瞬間ジュリアの頭が見える。それから足は見えないけれど、上半身が見えた、かと思ったら、かかととそれからつま先が見えてくる。彼女はどんどん進んでいく。ひざの上まで川の中に入ると、かがんで両腕に水をかける。水着の赤色が川面で壊れて散り散りになって見える。川は細かなさざ波を立てている。白い浮きを並べたずっと向こうを走るスピードボートのせいじゃないかな。父さんが話してくれたことがある。フウサトニック川は潮入川だって。今でも覚えている。「潮入」という言葉。今見えている、このさざ波は潮の流れってことはあるかな。フウサトニック川。口に出してみるのが好きな言葉。「ウウウ」と沈んでいく音が好き。この音は昔の映画の中で夜中

に電車が線路を曲がってやってくる時の音を思い出させる。ジュリアは水に飛び込んで、遠くの浮きに向かって泳ぎ始める。

「あんたも急いでお行きよ、ジミー」母さんが言う。「母さんはここにいるから。」そろそろ始めなきゃって思う。ずっと先延ばしにすることはできない。彼は日向に並べているタイヤのインナーチューブのほうに向かっていく。ちょっと斜めに重ねて置いてある手前の一つを持ち上げる。温まってほこりっぽいゴムをぎゅっと押して空気がちゃんと入っているかどうか確かめる。それからでこぼこした芝地の上を転がして、ピクニックテーブルの角を回っておばあちゃんが座っている松の木の方へと向かっていく。

松の木まではほんのちょっと。黒々とした木陰のところどころに小さな陽だまりができている中を歩く。かりかりと小さな音を立てる松葉とスポンジみたいな松ぼっくりの上を歩く。松ぼっくりの上を通ると靴下を丸めて作ったボールの上を歩いているみたいに足の裏を押し上げてくる。地面は弾力があるけれど、同時に固い。おばあちゃんは高い松の木の隣に座っている。松はちょっと前屈している。まるで日倒れ始めたのに、やっぱりやめたとでも言うように。左手にはもう一本松の木が立っていた。こっちも前傾している。二本の幹はまるで日の降り注ぐ川とずっと向こうのうっそうとした小さな山々を取り囲む額縁を作っているかのようだ。すべてが生き生きと目に飛び込んでくる。影の中に転がるあの大きな松ぼっくりは、お尻のほうに日が当たって輝いている。そして瘤のような木の根元のそばに落ちているアイスキャンデーのさくらんぼ色の棒。おばあちゃんが座っている椅子はポーチから持ってきた、背もたれが調節できる重たい長いやつ、じゃなくって、ほら、引っ張ると簡単に開くことができる背が直角の小さい椅子だ。おばあちゃんは濃紺の水着を着て、草履を履いている。足のつまは滑らかなピンク色に塗ってあって重たい髪の毛は不思議な色だ。白っぽくって黄色っぽいオレンジ色をしている。おばあちゃんはいつもうまく髪の毛を染められないと言って笑っている。彼女は川に続く急斜面の近くの木陰に座っている。両脚は日の光の中に突き出して、ひざの上に

本を置いている。彼女の指は関節のところで曲がっている。おばあちゃんはよく両手を挙げて彼に見せてくれる。ほら、関節炎だよって。椅子に張った編みこみは、白とライムグリーンが交差している。近づいていくと、おばあちゃんはこちらを向いて、開いた頁の上に片手を置いて本が閉じないようにする。

「おや、おあにいさん、行くんでしょ？ あっちにいるジュリアを見てごらん。」人は彼を見るとこんな風に声をかけたくなるのだ。それにしてもどうしてだろう。大将とか、おあにいさんとか。そんな風に呼びたくなるようなところが自分にあるからかな。ジュリアはもう浮きに届きそうだ。仰向けになって、足を元気よく蹴り出して、両腕を高々と上げて水を掻いている。「そうだよ、おあねえさん」と彼は言う。するとおばあちゃんは彼が期待したとおりの反応を示してくれる。おなかの底からしゃがれた声で笑ってくれるのだ。彼の答えを喜んで受け止めてくれる笑い方。この家族は皆頭の回転が速いから、こっちも気をつけてかからないといけない。朝寝坊すると、父さんはこんなことを言う。「昨日はまた夜遅くまで外で飲んでたな、え、ジム」とか「見よ、ムスコが起き上がる（注：「日が登る」ともう一つの「ムスコ」とをかけている）」とか。おばあちゃんの横に立って、指先でインナーチューブのバランスを確かめながら、彼は観察し続けている。おばあちゃんがはめている二つのプレスレット、一つはトルコ石でもう一つは銀だ。指はむくんでいて、関節が飛び出している。おばあちゃんの椅子のそばを通過して急斜面につながる土手の縁までの数フィートの地面には、日に焼かれてしおれた芝生がところどころかたまって生えている。坂道の上にはぶ厚く絡み合う松の根っこが見えている。白い糸が一本木の根っここのところにかかっている。こんなものを見ているのは楽しい。でも時には目につかないものもある。目の前の景色が何かにつながっているときにだけ気がつくのだ。

数歩歩くと急斜面の上に出る。そこは世界の端っこ。後ろにはおばあちゃんが椅子に座っている。その後ろには松葉を敷き詰めた地面。そしてピクニックテーブル。その後ろには日の当たる地面に敷いたブランケット。広場……でも

どうしてここで立ち止まるんだ。残りのコネチカットがずっと背後に広がっている。ビアズリー動物園のサル檻、石橋があちこちにかかったメリット・パークウェイ、そこを過ぎると、西 110 番通りのおばあちゃんのアパートが見えてくる。そのままずんずん行くとミシシッピ川、パイクス・ピークの高い山、そしてカリフォルニアに着いちゃう。愉快だ。前の方向にだって行けちゃう。彼の目の前には坂。川の岸边には砂っぽい地面があって、ジュリアが背泳ぎしている。それから白い浮き。こんもりと木が茂った小さな山々が川の向こう岸の方に見える。その山々を越えたらコネチカット州の向こう側に出る。ミステック海軍博物館から捕鯨船に乗り込む。沖に出て行くとどこかにコッド岬があって、大西洋が広がっていて、アフリカだ。ここに立って、あれこれ考えているのは楽しい。頭の中に思い描いている自分の姿も気に入っている。いかめしく川の向こうを凝視している自分。日の光に眉をしかめて、片方の手の指先をインナーチューブの上に置いて、もう一方は腰に置いている。川を下らんとカヌーに向かうその前に、ミシシッピ川の岸边に立つハック・フィン、背中に矢筒を背負ったインディアンの勇士だ。

でもここに一日中立っているわけにはいかない。ジュリアは浮き樽に寄りかかってこちらを見ている。片っぱの手をおでこにかざしてもう一方の手をこちらに振ってみせる。早くおいでよ、大将！ おばあちゃんも本から目を離してこちらを見ている。確かに「インディアンの入り江」での一日を始めたいのは山々だ。それは本当のこと。ここにきて必死になってやっているのはただ、できるだけ一日の楽しみの始まりを先延ばしにしていることだけだ。川に降りていく道は二つあった。一つは松の木の向こう側から降りる地面を踏み固めた道で、こちらは大人が使う。もう一つはここから直接降りる道でやわらかな土が足元で崩れ落ちていく。腕の下でしっかりとインナーチューブを抑えて、彼は急斜面からまっすぐ、半分滑り落ちるみたいに半分転げ落ちるみたいに下っていく。足の上に温かな砂っぽい土が降りかかってくるのを感じながら。それは手の平の中にふりかけられる塩を思い起こさせる。さあ、着いた。とうとうここまで来た。浜と呼ぶにはあまりに小さなオレンジで砂っぽい地面の一

角に立っている。皆がよく行く浜辺というのは本当の砂、しかもたくさんの砂があって、何枚ものブランケットと何本ものビーチパラソルと、塩っからい水と屋台と、カモメと、死んだカニと、砂州と、波で出来上がっているものだ。これは川の岸辺、そして場所が違えば様子も違う。ここでは砂っぽいオレンジ色の地面だけれど、もっと川下に行くと、大きな岩とガマの茂みがある。他に行くと川沿いのすぐ近くに木が生えていて、芝地がある。この名前もない場所は浜辺よりも優しい感じ。ずっと静かでもっとひそやかだ。後ろには斜面があって、目の前には茶緑の川が流れる。白い浮きがちょっと上下に動いている。まるで川が息をしているみたいに。

彼はじりじりと前に進んでいく。インナーチューブを転がしながら。9歩か10歩で水際だ。川のさざ波が見える。とても小さな波みたい。潮入川だもの。もしもこれが川だって知らなかったら、湖畔に立っていると思うだろうな。木の枝がたわんで水面に垂れ下がり、左右に川が曲がっていく先を隠している。だから目に入るのは、木が生い茂った小さな山々を背景にした湖、ずっと向こうの岸部に点々と立つ小さな家々、そしてちっぽけな人がその上に立って釣りをしている突堤。彼は日で温まった砂っぽい岸の上をチューブを転がしていく。岸辺には小石は転がっているけれど、ゴムみたいな海藻の塊はないし、紫がかった黒色のイシガイの貝殻もない。緑の空っぽのコカコーラの壺がまっすぐに突っ立って、場違いな様相を呈している。コカコーラの壺って海辺にお似合い。浜辺に敷いたブランケットの横っちょに砂に埋もれて斜めに立っているものだ。壺は緑の影を落としている。消えかかった足跡、水切りにはびったりの滑らかな平たい石が一つ。ますますドキドキしてくる。さあ、もうすぐそこだ。

水際で彼は立ち止る。気をつけて小さな波がつま先に届かないようにする。水を透かして見ると、川底に太陽が描く波模様が見える。まるで光でできた鎖の柵みたいだ。この川こそ目的地、彼の冒険の起点、そしてとうとうこの最終地点に来て彼は今一度立ち止っている。

すべてはこの一瞬に向かって進んできた。いや、違う。まだその最後の瞬間には達していないぞ。その一瞬はほんのわずか先にある。今のこの時間は待機停止の前。そしてそれを超えるととうとう待っていたものの只中に一気に突っ込む。彼は川の香りを吸い込んで、鼻腔の奥まで流し込む。ことが始まる瞬間に向かってずっと進んできたのだ。この朝起きてからというもの。いや、先週、父さんが仕事から戻ってきて、書類カバンを置く前にもしも天気がこのまま持ったら今度の土曜日に「インディアンの入江」に行くぞ、といった時からずっと。彼は一日ごとにその時が近づいてくるのを感じていた。それはまるで遊園地に行くのを待ち構えているような感じだった。あっちの隣の広場の真ん中にサーカスのテントが立つのを待ち構えているような感じだった。次の瞬間、待機時間は終わりとなる。待ちに待った日が正式に始まるのだ。それは彼が待ち構えていたものだった。それなのに、ここ川の水際にくるに至ってこの待機時間を手放したくない。力づくでこの時間にしがみついていたいたいのだ。水辺に立ちすくんでいると緑茶色のさざ波がつま先で碎けている。太陽が輝いている。ジュリアが手で差し招いている。白い浮き輪がやさしく上下に動いている。そして彼は戻りたい。あのトマホークの絵が描いてある木製の標識のあるところへ。そしてこの岸辺にたどり着くまでの時間をもう一度スタートさせたい。

どうしちゃったんだろう。どうしてジュリアみたいになれないんだろう。この日を待ちのぞんでいたんじゃないのか。もうすぐに彼は膝まで水の中につかって両手で水をばちやばちやっていることだろう。そして水着のトランクスまで水につかる。胸と両肩に水をかけてチューブの中にボンと乗って、ジュリアのほうに向かって水をかいていくことだろう。日の光を浴びて大声で笑うことだろう。そのあとでブランケットの上に身を投げて濡れた水着が日を浴びて乾いていくのを感じるだろう。ホットドッグを食べて、ピンクレモネードを魔法瓶から注いで飲むことだろう。太陽と幸福感に浸ってごろごろとしていることだろう。そして一日の終わりににはぎしぎしと音を立てる木製の脱衣所で水着から着替えることだろう。街灯に照らされた道を家路に向かう車の中で眠

ってしまうことだろう。でも今はまだ、待機時間の最後にいたってこうやって立っていると、何かがおかしい。体の奥底で動揺している。まるでもしこの日が始まってしまうと、何かを失ってしまうかのように。川に飛び込んでしまうと、このわくわくした気持ちを失ってしまう。待ちに待ったその瞬間に少しずつ近づいていくからこそ、すべてが大切だと思えるその感覚を。その感覚があると、すべてが生き生きとして見えるのだ。木の葉一枚、石ころ一つでも。でもことを始めると、すべてを使い切ってしまう。一日は君の背後にするりと遠のき始める。彼は物事のまだこちら側にとどまっていたい。こちらに持ちこたえていたい。不安が彼を襲う。太陽は輝いているのに寒気が満ちている。一瞬で一日が終わり始める。物事が彼の後ろに大急ぎで飛び去っていく。待ちに待った日は本当のところ終わってしまっているのだ。今、それがわかる。はっきり見えている。終わりは至る所にある。始まりの只中にある。それについて誰も何も教えてはくれない。物事の中に目に見えないよう隠されている。光り輝いて見える世界の薄皮のすぐ下で、すべてが死に絶え消え去ってしまう。日は沈む。一日が終わりを迎える。おばあちゃんは棺の中に横たわる。曲がった指の両手はその胸の上で組み合わせられる。素敵なお母さんも年を取る。関節が太くなって曲がってくる。その茶色の髪はくしゃくしゃで白くなる。誰もそれを止めることはできない。ジュリアも死んでしまう。父さんも死んでしまう。コカコーラの壺はボロボロになって緑の砂になる。すべては無になる。もしも彼がこのままここに立っていれば、もしも微動だにしなければ、もしかしたら阻止できるかもしれない。すべてがそのまま止まって誰も決して死ぬことはない。体がぶるぶる震えてくる。息ができない。この水際で彼はすべてのことの最後に立ち会っている。しがみつくすべがなければ生きていくことはできない。もう後へは戻れない。なぜってすべてを使い果たしてしまったから。前に進むこともできない。そうしたら最後に向かっていだけだから。この場で立ち往生している。ここでは無がすべてだ。無は暗闇のように、病のように、彼の上に流れ降りてくる。彼は見てはならないものを見てしまった。見る事が許されるのは大人だけのものを見てしまった。だから彼は年老いていく。それはすべてを滅ぼしていく。こめかみがどきどきする。両目の裏がずきずきす

る、彼は感じる。悲鳴が胸をせりあがってくるのを。砂っぽいオレンジ色の地面の上に倒れるように前のめりになる。「おおい、はやくう！」ジュリアが叫ぶ、そして喉を突き破るような大声を上げて、彼は一線を越える。一日の始まりだ。

3つの作品の翻訳についての覚書

ここに訳出した3つの作品に共通するキーワードは「記憶」です。

最初のジョン・ビゲネットの作品は、国と民族の歴史が、本来その国と民族とは無関係である人の記憶や歴史と微妙に交差していく物語です。私たちは主人公の目線で物語を読み進めていくものの、やがてはそこに出てくるほかの人々（生きているものも死んでいるものも含めて）の中にも深く、ときに暗い歴史が刻まれていることに気がつきます。やがてはそれらの人々の語られない、あるいは少ない言葉でしか語られない物語にこそ読者は心を奪われていくのです。

ジェニー・ホロウエル（Jenny Hollowell）の超短編（sudden fiction）は、気が遠くなるような生命の歴史の中に個人のほんのささやかな人生が埋め込まれ、語り手は、まさに sudden としか言いようのないその一瞬の輝きを鮮やかに浮かび上がらせます。2015年の6月に慶應義塾を訪れたカズオ・イシグロは、自分の物語の中で展開される記憶の土台は、静止した「一枚の写真」であり、その写真をじっと見ることによって物語を手繰り寄せていくのだと語りましたが、まさにこの物語でも写真は重要な役割を果たしています。最後に出てくる写真は、海辺で撮られた何の変哲もない写真であるからこそ、そしておそらくたくさんの人々の写真アルバムのどこかに貼られている写真であるからこそ、人生における振り返りを読者とも分かち合う重要なツールとなります。

スティーヴン・ミルハウザーの作品は、ホロウエルの対極ともいえるビルドゥングスロマンです。ここではほんの一瞬の出来事が、延ばしに延ばされて語られます。その中で起こる五感を通じた経験と豊かな感受性、次第に増していくスピード感は、成長の痛々しい記憶を読者の中に呼び覚まさずにはおられません。時は前にしか進まない。流れゆく川、食べられた後のアイスキャンデー

の棒、おばあちゃんの節くれだった手、見るものすべてがその事実を少年に突きつけます。川に入るというピクニックでの最高潮は同時に人生を下っていくしかない時の流れの折り返し地点の象徴でもあります。その最高点への到達をどうにか先延ばしにしておきたいと願う最後の少年の叫びはしかし、発せられたとたんに少年の中で忘れ去られます。「しがみつくなければ生きていくことはできない」と考えていた少年は、おそらく「忘れることで人間は生きていける」ことをも悟るのでしょう。

これら3本の作品はさまざまな経緯を経てここでの発表に至りました。3番目のスティーヴン・ミルハウザーはよく知られた小説家ですが、『ニュー Yorker』誌の2011年1月3日号に発表されたこの物語はまだ日本語に翻訳されていません。2番目のジェニー・ホロウェルは新進気鋭の女性作家。O.ヘンリー受賞者のジョン・ビゲネットは、シナリオも手がけ、数冊の作品集が出版されていますが、いずれも日本語には翻訳されていません。この3つの作品との出会いは、朗読されたものをpodcastで聴いたことがきっかけです。早速作品を取り寄せて、文字として読むことで、またそれぞれの作品は新たな解釈をもたらしてくれました。私は2011年10月から通信教育部で学ぶ方々を中心とした読書会を開催していますが、そこでこれらの作品を紹介してメンバーとともに解釈しつつ翻訳を試みました。

その後ホロウェルとミルハウザーの原文と試訳を、通信教育部の2015年夏季スクーリングの授業「身体知——創造的コミュニケーションと言語力」のテキストとして使いました。これは通信教育部の学生と通学生がともに学ぶ授業ですが、今年は聴講生も含めて22名の学生さんが集いました。授業では何度も声に出して試訳を読んでもらい、かつ言葉が流れない部分を手直していきました。朗読することで、個人の中での解釈が深まります。その後、人生の異なる段階にいるメンバーたちがディスカッションを行うことで、物語はさらにさまざまな解釈を生み出していきました。

こうして、さまざまな人の記憶と思いを経て3つの翻訳が導き出されたのです。あらためて読書会の皆さん、そして「身体知」履修者の皆さんには感謝いたします。ありがとうございました。